

A テーブルグループ討議 目次

1回目	2
-----	---

<出席者>

大井 葉月 委員
大竹 莉瑚 委員
杉田 真理子 委員

2回目	8
-----	---

<出席者>

伊住 禮次郎 委員
田口 成人 委員
三川 夏代 委員

3回目	14
-----	----

<出席者>

安野 貴博 委員
池坊 専宗 委員
仲田 匡志 委員

第 1 回京都市未来共創チーム会議
A テーブルグループ討議
議事録

テーマ：継承すべき京都らしさ、テーマ：京都らしさを阻害するもの

Q 1.

他の日本の都市にはない独自の価値観・まちの様子からあなたが考える「京都らしさ」とはどのようなものですか？

Q 2.

現状で京都らしさを損ねているものはなんですか。

1 回目

＜出席者＞

大井 葉月 委員

大竹 莉瑚 委員

杉田 真理子 委員

A テーブルファシリテーター

まずは、事前課題の内容について、その背景を補足しながら付箋を貼って共有していただきたい。順番は大井委員、杉田委員、大竹委員とする。それでは早速、京都らしさについて、付箋に書いた内容とその背景を補足して共有していただきたい。

大井委員

1 つ目は、歴史的な建物と日常生活の調和である。現在東山区で働いており、地元の方から清水寺に早朝散歩に行くのが日常であるという話を聞いて、そのようなことを思い浮かべた。

2 つ目は、ちょうど良い距離感である。京都は深入りし過ぎないが、互いに存在は知っており、あいさつもするところは防災の観点においても重要であると思う。

3 つ目は、京都の紹介文化である。京都のお店などでは、あの人から紹介してもらったというようなことが多々あるのではないかな。

A テーブルファシリテーター

3 つ目の紹介文化とは、人と人とのつながりという意味合いかな。

大井委員

お店も人もつながることが京都らしさであると考えている。

A テーブルファシリテーター

続いて、杉田委員にお願いする。

杉田委員

1つ目は、大井委員がおっしゃった歴史的建物と日常生活の調和が挙げられる。私は普段、都市デザイナーとして活動しており、いわゆるパブリックスペースを目にする機会が多い。公園やパブリックスペースの質や量はそれほど十分ではないまちかと思う一方で、やはり神社仏閣や歴史的な建物が観光的な資源としてというよりは、暮らしに近いものとして身近にあることが素晴らしい価値ではないかと考える。例えば昼休憩をしたり、帰り道に少し寄ったり、疲れて佇みたい時にそこへ行ける距離感が、私の思う一つ目の京都らしさである。

2つ目は、鴨川を起点とした自然の近さである。市街地から30分程度車を走らせると、京北や美山のような大自然に行くことができ、やはり鴨川は世界的に見ても素晴らしいパブリックスペースだと思っており、あそこまでの広さと距離で自由度がある、いわゆる自然公園のような所は、これからも価値として残していくべき京都らしさではないかと思う。また、盆地であるため山が近いことも大きな価値の一つかと思う。

それから、日本家屋や伝統的な家での暮らしを若者も体験しているまちが京都ではないかと思っており、日常的なレベルで町家を自分で改修して住むなど、リノベーションして暮らす方の話はよく耳にする。日本家屋がどんどん減っているとは言いつつ、そのような伝統的な暮らしや建築を日常的に体験している若い層が、全国的に見ても多いことが京都らしさの価値ではないかと思う。

もう一つは、個人事業主、自営業、個人商店の多さである。もともと東京に住んでいた身として、圧倒的に個人事業主や、職人、アーティストが多く、小さな規模のビジネスが生き延びられる環境だと感じている。私自身も長年、個人事業主、そして現在は小規模の会社を経営しているが、そのような個人の小さなビジネスが生き生きとしているのが京都だと思う。

それぞれのリズムで仕事ができるので、ワーク・ライフ・バランスが担保されているのが京都であり、京都らしさはそこから生み出されているのではないかと考えている。

大竹委員

パブリックスペースが少なく、質もあまり高くないという意見が気になったので、もう少し詳しく伺いたい。

杉田委員

この数年、公園が閉鎖されるケースを耳にする。行政の予算の都合により、例えば公園の樹木を切ったり、公園を閉じたりするケースがあるという話を聞いている。

また、海外から都市計画や建築に関わる方々が来た時に公園が少ないと言われることが1度や2度ではなく、非常に多かった。データとして数を見ているわけではないので、詳しいところは言えないが、全体として多いということはないだろうとは思う。

一方で鴨川や、御所のような歴史的な場所もパブリックスペースとして機能しており、いわゆる西洋的もしくは、教科書的という公園とはまた異なるパブリックスペースが京都にはたくさんあるのではないかと考えている。

A テーブルファシリテーター

続いて、大竹委員にお願いします。

大竹委員

1つ目が圧倒的な自意識である。「らしさ」を意識すること自体が京都らしいのではないか。私の地元は京都ではないが、京都の人は誇りを持っているイメージがあり、文化や歴史があることだけでなく、日本という国における都市の立ち位置に対しても自意識が強いと感じており、よいことだと思っている。

2つ目は、集える場所がたくさんあることである。先ほど杉田委員はパブリックスペースがあまり多くないとおっしゃったが、いわゆる公園は確かに少ないかもしれないが、川や広場の他にも、喫茶店やバーなどが集える場所になっている。ただ公園があるだけでは管理が大変かと思うが、公園以外の何かが集える場、コミュニティの場として機能していることが京都らしいと言える。

3つ目は文化の厚みである。歴史的伝統的な文化だけでなく、学生が多く、芸術系専門の学校が多いと思うので、新しいカルチャーがどんどん出てくる場所というイメージがある。東京などに対するカウンターカルチャーが京都では出やすいイメージがあるので、それも面白いと思っている。

もう一つは、学区など小学校を起点とした区分でのコミュニティの自治意識が強いことである。そういったコミュニティに学生や新しく来た人がうまく入ることができていないことは課題かと思うが、長く住んでおられる人は自治というか、グループ意識があると感じている。

大井委員

おっしゃるとおり学区の意識は強いと感じる。

A テーブルファシリテーター

それは人とのつながりへの意識なのか、距離感とはまた異なるのか、先ほど出ていた自意識に近いのか。

大井委員

大竹委員がおっしゃった文化のほうが人に近いかと。集える場所の例として挙げられた喫茶店も、地元のつながりがあるかどうかで、ふらっと入れるか入れないかに分かれてしまうのではないか。

杉田委員

カウンターカルチャーの話が出たのは非常によいと思った。私も京都らしさを形作る一つのポイントだと思う。学生運動や京都大学前の吉田寮の勝訴の話など、「らしさ」の根幹の一つだと思う。

A テーブルファシリテーター

続いて、京都らしさを損ねていることについて大井委員から発表いただきたい。

大井委員

1つ目は、昔からあるように外見だけを見せたり、似せたりしている新しいお店や物である。これらは丁寧さに欠けてしまい、無理に京都になろうとしている雑さや粗さを感じてしまう。

2つ目は、派手さである。大阪や東京のようなにぎやかさとは少し異なるのか、華やか過ぎるものは浮いて見えてしまう。

Aテーブルファシリテーター

この派手さは、京都というまち並みにある派手なものが京都らしさを損ねてしまっているということか。

大井委員

そういったよくある看板や建物、景観だけではなく、雰囲気的なもので、京都特有のものがあると思う。

Aテーブルファシリテーター

続いて、杉田委員にお願いする。

杉田委員

1つ目は、コミュニティの閉鎖性である。昔から言われていることで、京都に移住してきた方の多くが思っているかもしれないが、私自身も移住してきて、夫が外国人ということもあり、ハードルを感じるが多々ある。京都らしさを追求するあまりのプライドや価値にとらわれた閉鎖性があると思う。世代によっても認識の差があり、解決していきたいポイントの一つだと考える。

2つ目は、近年のマスツーリズムがあまりにもひどいことである。特に東山周辺、四条烏丸周辺をはじめとするいわゆる中心部は市民が行くのを躊躇う程である。私はできるだけダウンタウンには来ないようにしているが、例えば1本道を離れると、誰もいなくなるにもかかわらず、1つの所に人が密集する状況は、市民にとっても来訪者にとっても心地よくない体験である。マスツーリズムは抜本的に京都らしさを損ねている要因の一つであると思う。

3つ目は、都市デザインの仕事をしているため、車の交通量の多さや交通システムの煩雑さが気になっており、まち並みにも関係していると思う。京都らしい狭い道路に道幅ぎりぎりの車が走っていたり、そこにマスツーリズムの混雑も相まって自転車が乗りにくかったり、バスも混んでいたり、市民としてはすごく過ごしにくくなっていると感じる。京都に来て気持ちいい、歴史を感じられるという体験を崩している要因の一つだと思う。

4つ目は、意思決定の場における多様性の無さである。これは様々なレベルで言えることかと思うが、やはり女性や外国人、障害のある方、マイノリティーの方々が意思決定の場に顔を連ねている印象はまだまだない。やはり公的なイベントのプレゼンターや登壇者の顔ぶれを見ていると、スーツ姿の男性ばかりであることが多いので、気になるポイント

かと思う。

最後の点が私は一番大きいと思っており、京都は、歴史的な建物やまち並みの保存が意外とうまくないと思っている。例えば看板の色合いを合わせるといった細かい部分での規制はあると思うが、そのようなものがありつつ、歴史的な価値の建物が毎月のように立て続けに更地になり、駐車場やマンションになったりすることを日常的に目にしていて、これは大丈夫なのだろうかという危機感を覚えている。そして、建物一つ一つの話ではなく、まち並み全体として考えるべきことだと思うので、今後議論していきたいとポイントかと思っている。

A テーブルファシリテーター

続いて、大竹委員に願います。

大竹委員

学生の私が一番気にしているのは、大学がつまらないことである。大学は独立した組織であるはずだと思うが、今は産学官連携が盛んで、研究や学びがビジネスに結構寄ってしまっているのではないかな。お金がないことも問題だと思うが、産学官連携によって学びがビジネス寄りになってしまうと、結果として京都の面白さはなくなってしまうと思う。学校では政治活動が制限されており、政治的な発言に厳しかったり、立て看板がすぐに撤去されたりしているので、より楽しく学べる場になってほしいと思う。

距離感が関係しているが、よそはよそ、うちはこちらのように、あまり異質なものを受け入れない節があるかと思う。また、京都の産業は分業で残ってきたと聞いたことがある。それ自体は悪いとは思わないが、自分が関係していること以外への関心が低いので、結局、自分が関わっていない分野に対してあまりアンテナを張っていない感じがしており、歴史的なものに対して取り残されていると感じる。

もう一つはハブがない、もしくはあったとしても機能していないことである。これは最近まちづくりに取り組む中で感じている。面白い取組があちらこちらで起こっているがそれぞれがつながっておらず、どこで何が起きているかを誰も把握できていないため、行政の方である必要はないが、個人があちらこちらを行き来する中でハブのような機能をする人がいたりしても面白いのではないかな。自分の仕事だけをするのではなく、あちらこちらに移動しながら働くような人がいてもよいと思う。

他には、新しいものを作り出すという成長的な意識が強い印象がある。しかし、人口が減っていく中で空き家などあるものをどのように活用するか、どのように巡らせていくかを考える方がよいのではないかな。

A テーブルファシリテーター

これは新しいものを作るだけではなく、今までのものを生かしていこうということか。

大竹委員

そのようなイメージである。マインドとして成長戦略はもう無理ではないかという感じだろうか。人口減少している中で、移住者が増えたところで人口が減っていれば、従来の

ような成長や拡大的な政策の作り方では立ち行かないと思うので、減少、縮小していくことに合わせて巡らせたり、あるものを活用するのがよいのではないかとということである。

最後に情報過多である。やろうとしていることが多いイメージはあるので、それ自体は面白いが、いろいろなものが出てきたはいいものの、先ほどのようなハブだったり、まとめたり、接続させる人がもっと必要ではないかと考える。

A テーブルファシリテーター

この情報過多は、具体的にどのような情報のことか。まちづくりに関してか。

大竹委員

年配の方の話を聞くと、次々と新たな政策が出てくるが、どれも長続きせず、様々な資料が配られるが、よく分からないとのことであった。電子化に付いていけない高齢者の方がまちに関心がある印象があるので、届けたい人に届いていないという意味でも整理できていない。電子化は賛成だが二次元コードを読み取ることができないとも言っていた。

A テーブルファシリテーター

皆さんから共有していただいた事前課題を分類したので、これまでのことも振り返りながら、もし違和感のある部分があれば御発言いただきたい。議論を簡単に振り返ると、京都らしさを損ねているものに関しては、いわゆる歴史あるまち並みの保存がうまくいかなといった話や雰囲気の話と、閉鎖的なコミュニティである部分や、人との関係性の話、オーバーツーリズムをはじめ、システムがなかなかアップデートされていないといった意見が出た。

大竹委員の意見はまちの話も含まれるが、新しいことをつくるだけではなく、まちの人にきちんと浸透させるべきだというまちづくりの話、それから、学びの場に関してはもう少しアップデートすべきではないかという意見があったかと思う。

杉田委員

成長戦略の限界と減少や縮小の時代に合わせた戦略が必要ではないかという意見については、本当にそのとおりだと思う。

大竹委員

マストツーリズムと交通の話に関連するが、大学時代に車椅子の人が京都でどのように楽しく観光できるかを研究していた。人が多いため、公共交通機関に乗れない。電車がないので、基本的にバスを使わなければいけないが、バスは混雑しており、乗車拒否されることがすごく多い。歴史的な観光資源が多いが、車椅子との相性はとても悪いと思っている。

車椅子だけではないが、車椅子の人が移動しやすいまちは子ども連れの方にも優しいまちだと思うし、高齢化していく中においても必要であるため、まちづくりを考える際にはバリアフリーの観点も意識しなければならない。

2回目

<出席者>

伊住 禮次郎 委員
田口 成人 委員
三川 夏代 委員

A テーブルファシリテーター

それでは、伊住委員から京都らしさについて、発表をお願いします。

伊住委員

1つ目は、鴨川で日焼けをしている人である。鴨川で寝ている人もいれば、隣でトランペットを吹いている人もいたり、本を読んでいる人がいたり、子どもが遊んでいたり、隣の人が何をしているのかをみんなが微笑ましく見ている状況が成立していることが京都らしいのではないかと。それは人を気にしていないという話ではなく、景色の中にいる自分が心地いいという場が多くあると思う。

1回目の議論で閉鎖的なコミュニティという話題が出たとのことだが、私はそれほどネガティブなこととは考えておらず、小さいコミュニティがたくさんあり、それらが少しずつ有機的に連動している状態は面白いのではないかと考えている。お互いを気にしていないわけではないが、様々な人たちが動きながら景色をつくっている状態は、非常に京都らしくてよいと思うところである。

2つ目は、奇人が溶け込むまちである。それぞれの領域で不思議なことをやっている人が多くいると思う。私の知り合いに鴨川で釜をかけて、お湯を沸かしてお茶を立てて道行く人たちにお茶を差し上げている変わった茶人がいるが、風景に非常に溶け込んでいた。いろいろなものがあるが、きちんとその場になじんでいる感じは、京都としての懐の深さがあると思っている。その人たちが妙に際立って変なことをやっているとはならないのは、京都らしいところではないか。

そのような不思議な活動というか、少し際立った活動をしていても、京都のまちの中になじむところは、懐が深くてよいと思うところである。

それから、まちのつくり方と言えばよいのか、基本的には職人が多いまちであり、手作り感のあるまちだと思う。祭りもそうであるが、民間が作り上げているものはたくさんあり、単なる手作りではなく、やはり洗練された技術が積み上がってきた手作り感があるので、洗練した手作り感をキーワードとして挙げている。

京都市基本構想に記載されている6つの得意技の中に、めききがあったと思うが、めききはやはり本物に触れているから出来上がってくるものであり、環境がつくるものでしかない。近くに本物の手業があり、それがまち中にある状況で生活していると、自然に目が肥えてくると思うので、そのような環境が少しでも減らないように努力し、むしろ技術を持っている人たちが活躍できる場をどんどんつくるまちとして抱えていくことが、京都の豊かさではないかと思う。

三川委員

日焼けをしている人などはすごく面白いと思っており、先ほどのテーブルでも出たが、京都は目的なしでいられる場所が非常に多い。

伊住委員

確かにそれはある。

三川委員

東京と比較すると、東京の場合は目的ありきで移動するが、京都はふらっと鴨川に行つて、特に何もせずに過ごしていると周りが面白いことをしていて、自分が自然とそこに介入するといったことが起きるのは一つ面白いと思った。

奇人の話も興味深い。人が集まって、そこがコミュニティになり、場所になるパターンが多いと思うが、京都の場合はそもそも空間があり、その空間に人が行くことで何かが起こるのが面白いと思う。おそらく厚みのある文化の空間があるので、そこに何も無い人が行ってもその場をどのように自分が楽しもうかという考えになり、人が空間によって刺激されるような場所が多いのではないかと思った。

伊住委員

確かにそれはあるかもしれない。茶道具ではないものを茶道具として使うことを見立てというのが、今、京都にあるものを見て、これは自分にとってすごく有意義に使えるような場所だということになじませていく。先ほどの議論では、住んでいる人と動いている人の話をしていたが、市民は愛する気持ちを持っているのでよいが、京都は学生もそうだが、出入りが多いまちなので、出入りする人たちがいかに京都に何を残していくかがすごく重要だと思っており、鴨川でお茶をしていた私の知人はそこに景色をもたらししてくれた。あそこに行ったら、あの人がいるような気がする。それも文化だと思う。京都の人ではなかったが、それも京都の風景になっていたのも、そのような何か動いていく中で残っていく思い出や記憶が積み重なって、京都ができているのではないかと思っている。

田口委員

私も懐の深さを挙げている。何をやっても、程よく誰にも気にされてない。

伊住委員

私もとても腑に落ちる。

田口委員

東京の人が京都に来て遊んだりしていると、雑談がしやすいという話をしていた。またある人は5時間ぐらいしゃべってからがスタートだと言っており、会議などでは最初是通过一遍のことしか言えず、その後から本質的な話が始まるが、そこまで至らないという話をしていたので、雑談の重要性というのはあるかと思う。最近でも、鴨川で深夜までしゃ

べったりするしたことがある。

伊住委員

そのような時にこそアイデアが出てくるのだろう。確かに雑談カルチャーはよくて、雑談が頻繁に起こるまちはよいまちである。

A テーブルファシリテーター

続いて、京都らしさを損ねているものについても議論していきたい。

伊住委員

京都市においては、観光客の受け入れ方の話が一番重要だと思っており、基本的には適切なキャパシティーを超える対応が相当なところで出てきている。適切なキャパシティーを守りながらやる場所は、例えば一見さんお断りのような場所だったりすると思うが、そうではないところでの京都の対応がどれぐらいできるかは、動いている人たちがどれぐらい京都に何を生み出してくれるかという話につながってくると思う。

ここに行かないと大勢の人が行けないというように、局所的な集中が起こると思うので、それに対する全体設計がないと、局所的な混雑や交通システムまひに繋がり、京都に行ってもしんどいから行かないようにしようという話になると思う。それは、全体設計が欠如しているからである。

次に観光客についての話だが、自由に動いてもらうのが観光、旅行の醍醐味だと思うが、それをどのように意識的に制限してもらうかという話が重要である。京都の場合は、お寺でもこの先立ち入り禁止という合図があったり、何となく初めての人も違和感を覚えて自粛する人が一定数おられるのではないかな。

それは素晴らしい感受性だと思う。闇雲に禁止するわけではないが、自由と制限をいかにバランスよく両立するか。ただ禁止するだけであれば、反発されることもあり、上手に導く設計が必要である。それを考えるために、このビジョンを作っているのだと思う。

田口委員

先ほどのテーブルでは、誰のためなのかという話が出てきた。観光客にとってよいことと市民にとってよいことはバーターになっていることもあり、バランスの話になるが、その際には主語の解像度が様々ある。私自身も観光客の時があれば、市民の時もあれば、市職員の時もあるという意味でまちを生態系的に捉える必要があるのではないかな。

伊住委員

特に今は明らかにオーバーツーリズムで、たくさんの方が来ている状況をきちんとよい形で住んでいる人に還元できるかということ。観光客の人が来てくれているから、この文化財の一部が守られているのだというありがたさのようなものがないと、京都市民が発起するとは思わないが、バルセロナのようにデモが起これかねない。観光客に来てもらうことで、それが一つの財源として地元の文化財が守られていることは、みんなにとって一番

納得感がある形かと思っている。

田口委員

確かに受益者と負担者がズレていると問題が起こる。

伊住委員

ただ入って出ていくだけの状況だと、ただ消費されて終わりという話になってしまうので、文化を担ってもらふ必要性が少しでもあるのではないかと思う。観光客は観光客という一種の分断のようなものはある種、京都らしさを損ねているものかもしれない。

三川委員

全体設計の欠如や京都らしさであるゆったりとした空間の話にもつながるが、全体設計に失敗し、キャパシティを超えると、このバランスが崩れてしまい、結果的に京都らしさを提供できず、自由と制限のバランスが大事だとなった時に誰がそれを担うのか。

京都市民だけではなく、観光客などみんなに分散して責任や自由を享受し、守るように、片方に寄らないような設計が大事だという話をしていた。

伊住委員

非常に理解できる。先ほどのテーブルでも少し似た議論になっており、住んでいる人が例えば京都市に対して何か物を言う権利が1あるとしたら、観光客も0.01ぐらいあってもいいのではないかという話があった。いかにわずかだとしてもゼロとは違うので、そうすればただ消費するための都市ではなく、自分が行くことで関わり、京都というまちを守っていけるという感覚になるかと思う。

京都らしさが何かという話に戻ってしまうが、学生も多く、出入りの多い場所である一方で、長く住んでいる方も多く、固定された人たちと流動している人たちという大局的な二者がいるまちだと思うので、そのバランスは住んでいる人たちだけの目線ではない何かも必要ではないかと思う。結果的に外来文化が京都らしさになっているカルチャーもやはり一定数ある。何かもたらしてくれているものは、お茶など伝統の世界にもある。

田口委員

1と0.01の話があったが、例えば京都駅を使う人は京都駅に対してもっと言いたいのではないか。一方で私のように自転車でどこでも行くような人は特に言いたいことはなかったりする。

伊住委員

自分の生活に明らかに関係ないところもあるだろう。

田口委員

難しいと思うが、各部分で関わる人が変わる場合に、その人たちが意思決定にきちん

と関われるか、受益できるかどうかを考えなければ、全体としてこちらかこちらとすると、絶対に割れてしまう。

伊住委員

たくさんの小さいコミュニティが有機的に動いている状態はよいと思う。ここに関して物を言いたい人がいる一方で、それほど気にならないという人もいる。熱量はそれぞれ異なると思うので、京都駅であれば京都駅の利用者みんなで考えていこうというコミュニティが動いていて、その周辺で商店をやっている人たちが何か物を言い出して、結果的に全部つながって京都になるという話かと思う。

三川委員

今の話の続きかもしれないが、先ほど話が出た中で京都がどんどん均一化、画一化してきている話があった。このような小さいコミュニティや懐の深さなどの変数を見捨ててしまうと、どんどん東京や大阪のようになってきてしまうし、やはりこのような小さいコミュニティの地元の人の目線も大事だと改めて思った。かといって観光客をゼロにする話ではなく、きちんと交ざり合って共生するならば、誰にとって住みやすい京都なのかを考えていく必要がある

田口委員

最近読んだ本では、鳥の目線とアリの目線があり、アリの目線が地元の目線で、鳥の目線は上から計画する人の目線であるとする、伏せたり立ち上がったたりするミーアキャットの目線が大事だという話があった。

伊住委員

ただ、観光客が入れない場所も相当数あり、それは損ねているポイントでもあるが、その奥行きが京都らしさでもあるというか。京都らしさと京都らしさではないのを区別することは少し難しい。

田口委員

「一見さんお断り」と言うが、そうすることで、常連が行ける環境を維持しないと、お店側のもともとの趣旨を維持できないという話も聞いたりする。

伊住委員

京都はひいきの店があるカルチャーである。閉鎖的なコミュニティとも言えるが、一部の熱狂的なファンがいるコミュニティとも言える。それも京都らしさではないかという気はしている。

田口委員

完全に入り込む余地がない程閉鎖的な空間は、あまりないのではないかな。

伊住委員

それほどないと思う。

田口委員

だから、その場所を良くする、貢献する人であれば、入れなくはないという意味ではそれほど悪いことではないかと思う。

伊住委員

1週間後に入れてほしいというのは無理な話であるが。

三川委員

それこそ信頼をきちんと築いていった上でなくてはならない。

伊住委員

そういう意味では、時間をかけて面白くなるのが京都らしさかもしれない。大学も面白い。行儀が良過ぎる大学はとても面白いと思う。

A テーブルファシリテーター

1回目の議論では、産学連携を言い過ぎて、学生からすると、逆にビジネス色がすごく強くなっているのではないかな、それは本当に学びなのかという意見が出た。

3回目

<出席者>

安野 貴博 委員
池坊 専宗 委員
仲田 匡志 委員

池坊委員

奇人が溶け込むまちや鴨川で日焼けをしている方がいることは、京都のすごくよいところだと思う。京都が東京のミニチュアシティーのような便利なまちになり、既視感のあるまちになりつつある。

そうすると、最終的に他の都市に負けていくと思うので、たくさんの奇人がいればよいし、日焼けをしている方がいてもよい。より多極的というか、便利な側面を強化していくのではなく、様々な灰汁に強い「極」が同居しているまちを目指した方がよいのではないかと思う。

そのためには、計画的にまちづくりをしていくというよりは、そのような自然発生的に生まれていくものを助けていくような、土を耕していくような活動を行政にしてもらう方が、何回行っても京都は変わった人やものに出会ったり、刺激があって面白いのではないかと思う。

鴨川はとてもきれいになってしまった。それはよいが、私が小さい頃はあそこで野球をしたり、日焼けをしている方もなじんできて昼寝をしたりしていた。それがしづらくなると、どうなのかという感じがする。

仲田委員

今のお話を聞いて、先人の方々も思いをベースに動けることをすごく大事にされていたのではないかという気がした。計画的であるとか、きれい過ぎるというのはある種、これが正しい、これが美しいという下につくられていると思うが、むしろ一人一人の感性や価値観を出して、それを面白がれるところに京都は本物だというお墨付きをしてきたように感じた。

ただ、派手さが損ねているとすると、金閣寺は派手なのかどうか。派手ではないと思っているとすると、それは個性として何か面白いものとして捉えてきた流れがあるのではないかと思った。

安野委員

これまでの議論で学びの場がつまらないと書いてあるが、ここはどのような議論があったのか。

A テーブルファシリテーター

大学などがたくさんある京都なのに、産学連携を謳い過ぎてビジネス色が強くなっているのではないか、なかなか京都らしい学びがなく、画一的な大学が結構多いのではないか

という意見が出ていた。もしかすると、そのような学びがあるかもしれないが、そこが伝わっていないことが課題かもしれないが、そのような議論が出た。

安野委員

最近の京都らしさかもしれないが、学生が多いのはよい京都らしさであると思っている。

池坊委員

京都の学生は確かに人口の1割程いて、学生同士やビジネスマンとの交流もよいが、せっかく若い世代だから、より古いものとの接点をものすごく増やした方がよいと思う。京都の地元の小学校であれば、帰りに竹屋さんがあり、竹で作っているものを窓からのぞきながら帰ったり、そこに遊びに行って、何か竹で作っているものを体験したりしている。体験がないと、本当のクリエイティビティは生まれないと思う。京都は、それができる環境にある。だから、より小中高の体験、あるいはそのようなものに触れていなければ、京都はこのようなところがよいと、本当に胸を張って言えないと思うので、古いものと今の若い刺激的な世代を結び付けることが大事だと思う。

文化やこれまで続いてきた暮らしに対する若い世代の解像度がかなりの勢いで下がってきているように感じるので、教科書でしか松の写真を見たことがなければ、能舞台に行っても、あれは何の木かという話になるではないか。松ヤニがあるなどは触れないと分からない。

A テーブルファシリテーター

それは具体的にどれくらいの世代からすごく変わったという感覚があるか。

池坊委員

私は自分の教室で餅つきをするが、20代の方は1回もついたことがない人がいる。私は今30代だが、同年代であれば、旅館やまち内会などどこかで1回は体験したことがある。1回でも少ないと思うが、ゼロと1は極端に違う。お米も食わず、餅つきもしたことがなければ、餅に対する感覚も違うので、体験したことがあるかないかはものすごく違うと思う。

仲田委員

一番学びの深さのあるまちが京都ではないか。

池坊委員

その通りで、それができる環境が近くにあったりするのに知らないことがある。

A テーブルファシリテーター

それはなぜだろうか。昔はできていたのに、できなくなっているのか。

仲田委員

簡単に早くないからではないか。

池坊委員

それから、今の若い人はお行儀がよいというか、きちんとしていると思う。だから、近くに面白そうなおじさんがいても、飛び込みで何をやっているのかと行く人はいないのではないだろうか。

ただ、私のお花の教室に来る若い人は、和花や伝統的なものを逆にやりたがるので、絶対に興味はあるが、その一歩について自分でハードルを抱えてしまう。だから、クラスや友達など何かの後押しが一ついるのだと思う。

仲田委員

京都のまちがインスタントではないのではないか。

池坊委員

ただ、深いところではそのような醍醐味があるが、汚さない程度に平易な広い入り口も設けていく必要がある。広い入り口と深い入り口のどちらもないといけない。ハードルは高くないのに高く感じるのだろう。

A テーブルファシリテーター

人やコミュニティについても、相反していて、いろいろな小さなコミュニティが有機的に連動し、面白い人がたくさんいるのが京都らしさではあるけども、外の人からすると、少し閉鎖的に見えてしまい京都らしさを損ねているのではないかという話が出ていた。

仲田委員

守ってきたものがあるので、閉鎖的だったと思う。一見さんお断りも排除したいわけではなく、守りたい何かがあり、つまりこのお店の楽しみ方やそのお店のことを分かっていたお客さんに来てほしいので紹介制にしているのに、一見さんを断ることが目立ってしまっている。

そのような信頼性を基に守ってきたものがあるので、たぶん損ねることと損ねないことのコインの裏表のようなものを、裏になっているものをどのように表にするかがポイントかと思った。

だから、閉鎖すると確かに広がるのが難しくなる一方で、必ずしも開き過ぎた状態がよいのではないので、程よいバランスは何か。つまり時代に応じてどのようにチューニングするかのバランスをむしろ京都はきちんと取り続けてきたので、老舗や長寿企業さんが営みを続けられてきているのもあると思う。そのバランスがとてもすてきなのだと思う。

池坊委員

このようなことを言うと、京都人だからという話になるが、東京は人間関係を取っ換え引っ換えできるだけの人口があるから、そのようなシステムはいらない。ただ、京都は長い信頼関係やつながりを保つために、多少のルールや規制、自己抑制が必要だと思う。

京都もまち内会やお祭りといったいろいろな次元のコミュニティがあるが、全部に入る必要はないので、自分の好きな居心地がいい場所を見つけていけばよいと思う。だから、そのように考えてもらおうとよいのではないか。

安野委員

コミュニティでいうと、奇人が溶け込むまちと書いてあるが、なぜ奇人は溶け込めるのだと思われるのかを聞いてみたい。

池坊委員

京都は個性の強い人が多いので、協調性という意味ではなかなか一枚岩になれなかったりするが、そういった人が要所、要所にいないといけないし、それが京都のよいところでもあると思う。

安野委員

奇人が溶け込めるという話と、紹介文化でコミュニティに入れる人と入れない人がいるというのは若干矛盾しているようで、理解もできているので、なぜだろうと思った。

仲田委員

その矛盾こそが面白さなのかもしれない。まさに分かりやすく型にはまっていないところを無意識に面白がっているのかと思う。あくが強く、一枚岩になりにくいところもあるが、そのおかげでなっているものを楽しめてきているようにも感じ、私は矛盾のままでよいと思う。

池坊委員

東京にいる奇人は、人目を意識した奇人が多い。京都は本当の奇人。他人が伸び伸びしていることを許すことは、自分も伸び伸びしていい、奇人になっていいということでもある。

仲田委員

基準が外ではなく、きちんと内にあるのではないか。

経済界の方々とお話すると、人の目よりも、京都経済という生態系をきちんと見て取引されていると感じる。東京が見積書で行き来する取引であるとするならば、京都は誰々さんのところという信頼で買おうとしており、経済を生態系で捉えている感覚である。

池坊委員

今は少し変わったが、やはり京都のものづくりはずっと分業で来ているから、1つがつぶれると、川上も、川下も全部つぶれるので、きっと自分だけが何とかなればいいということではない。